大学の中の異文化

「社会を読む鍵としての大学：タイの大学でのフィールドワークを事例として」

サブ・テーマないしは第二の調査地として、「大学」をフィールドワークすることのすゝめ

首都大学東京大学院　博士後期課程
小川絵美子

◆大学の中の異文化

1. テーマ設定とワークショップ開催の経緯

東アジア人類学会のメンバーが中心となり、日本文化人類学会課題研究懇談会「東アジア公共人類学懇談会」が立ち上げられる。

「近年、東アジア間の移動が急増しているが、それに伴い観光地、職場、地域コミュニティにおけるトラブルがしきりにニュースで報道されるようになっている。だが、こうした葛藤や事件の多くが実は東アジア各国/地域における社会・文化システムの相違に起因していることは意外と知られておらず、隣国間の偏見をますます強める結果を招いている。本懇談会は、こうした問題にこそ人類学が貢献する余地があるとする認識のもと、人類学内外の対話を重視する公共人類学の立場に基づき、社会・文化の側面からトラブルの減少にとりくむことを目的とする。」（河合洋尚代表　課題懇談会申請書より）

公共人類学懇談会の中で、「移動」「観光」「婚姻」「会社」「学校」の人類学が下位テーマ

⇒「学校の人類学」の一環として、「大学」をとりあげるワークショップを計画

2. なぜ「大学」なのか：「大学」とは

●国家にとって、

最高教育・研究機関＝

①国家の中核を担う人材の育成機関

②対外的に権威、国力を示す役割　国家の情勢を反映　⇒当該国の社会の縮図としての潜在性？

●学生にとって（学校として）、

①異なる背景を持つ者と初めて接触する場

②高校までと比較し、主体性が必要になる場

③身分を付与してくれる機関

●人類学者、学徒にとって、

①自己の生活領域＝自文化圏

②調査地への入り口（留学先、現地受け入れ機関、語学研修の場 etc）

⇒特定のコミュニティに入る前に、現地の習慣、言語、公共マナー等を学ぶ場

●公共人類学の観点から、

異文化摩擦、文化衝突が頻繁に発生する場

e.g 留学生、出身地方、校風 etc…

⇒個別事例から人類全体の普遍性を追究する学問である人類学において、該当社会の文化的差異を顕在

化しつつも、国家の差異を超え共通性、類似性を多くもつ大学という社会集団は、研究されるべきフィールドであるといえるのでは？

3.　「大学の人類学」: 大学をめぐる先行研究

●その社会におけるあり方や役割を扱う「大学論」

eg. J.H.Newman 1873 *"The Idea of a University*,

Abraham Flexner 1930 "*Universities: American, English, German*".

●高等教育の大衆化を扱うもの

eg. Martin Trow 2000『高度情報社会の大学―マスからユニバーサルへ』、

●若者論、青年論の一部として「大学生」を扱うもの

（eg.小此木 1978;古市 1983;栗原 1981;新堀 1985;西平 1990）

●人類学においては、興味深い対象として認識されてはいる

加藤秀俊 1989「大学人類学への試論」季刊人類学　講談社・京都大学人類学研究会編集

Peter Sacks 1999 "*Generation X Goes to College: An Eye-Opening Account of Teaching in Postmodern America*".

船曳 建夫 2005『大学のエスノグラフィティ』

橋本鉱市 2010『大学生 キャンパスの生態史（リーディングス 日本の高等教育 第 3 巻)』

⇒関心は集まるものの、真っ向から研究対象とするには困難が伴う

⇒サブ・テーマとして（秘かに）注目し、多分野、他地域の研究者との議論するには格好の題材

⇒公共人類学のテーマとしての潜在性は充分

☆サブ・テーマないしは第二の調査地として、「大学」をフィールドワークすることを提案

⇨　PR:　話題提供者募集中！

◆「大学」を人類学的に読み解くひとつの試み　～「大学」をイニシエーションの場と捉える～

1.　イニシエーション論

●儀礼研究におけるイニシエーション論

ファン・ヘネップが『通過儀礼』（1909）の中で提唱

通過儀礼…「分離」「過渡」「統合」という三つの局面が共通する、時間的、空間的移動に伴う儀礼

イニシエーション儀礼…通過儀礼のうち、「過渡」が強調される、加入礼、成人式などの儀礼。特に後者については、身体的成長を示すのではなく、社会的地位の確立のために行われることが特徴である

→集団への成員権の獲得のための加入礼と、成人としての地位の確立に際して行われる成人式の、差異と連続性をめぐる議論が展開される（eg.Eliade 1958; Allen 1965）

→ヘネップ以降、雑多に広がったイニシエーション儀礼にまつわる研究の整理（eg. La Fontain 1985）

●内面的変化としての「イニシエーション」

河合隼雄が『大人になることのむずかしさ』（1996）において、発達心理学に応用

・現代社会には明示的なイニシエーションが欠如し、成人と子どもの境界の曖昧化、モラトリアム期

の遷延が拡大しているという議論

イニシエーション…内面的成熟や変化を促す個人的経験　　※必ずしも儀礼の形を伴わない

⇒本発表における定義：

イニシエーション儀礼…通過儀礼の下位概念。集団への成員権獲得のために、もしくは成人としての身分の確立のために、集団で行う儀礼を指すものとする。さらにその差異と連続性の上にある儀礼の全てを含む

個人型イニシエーション…個人の内面的成熟を喚起する経験、体験。いわゆる儀礼の形を伴わないものも含む

2. メタ・イニシエーションとしての学生期間

●ある一定の年齢に達した者親から隔離され、集団で訓練を受け、知識を与えられるという点から、今日の「学校」というものを、かつてイニシエーション儀礼が果たしていたのと同じような役割を果たすものであると捉える

●「大学」は、在学生の多くは年齢的にも成人への過渡にあり、その卒業後は成人としての責務を負うことが期待されているという点が特徴的

→「大学」は、若者に個人型イニシエーションの機会を与える空間であると捉える

→イニシエーション論の人類学への引き戻し、イニシエーション論の再考

●タイの大学におけるイニシエーション儀礼という事例に注目

→現在のような形態のイニシエーション儀礼の発生と存続の要因

⇒・大学における「入学式」、いわゆる「新歓」に含まれるある種の儀礼、フラタニティ・ソロリティなどの加入礼を、「イニシエーション儀礼」とする

・大学内における学問、サークル活動、部活動、友人関係、学外におけるアルバイト、ボランティア活動、旅行などを「個人型イニシエーション」であると捉える。

3. タイにおける大学

【特徴】・王族や貴族のための宮廷教育に起源を持つ

・60 年代以降、教育改革が進められ、高等教育機会が急速に拡大

【略史】

1916 年　ラーマ 6 世によりチュラロンコン大学が創設される。

→1902 年にラーマ 5 世によって設置された国立官吏教習所を前身

1932 年　立憲革命後、多くの専門大学が設立される。

→政府関係機関の職員を育成することを目的: eg.タマサート大学（1932）、マヒドン大学（1942）、カセサート大学（1943）

1960 年　ユネスコ「カラチ・プラン」を契機に、教育制度の改革が成される

→高等教育機会の拡大を目指す。国家教育計画（National Scheme of Education）の実施（1961）

・地方総合大学の創設　:チェンマイ大学（1964）、コンケン大学（1965）、ソンクラー大学（1968）ラムカムヘーン（1971）

・オープンユニバーシティ、放送大学の創設　:スコータイ・タマティラート大学（1978）

・私立大学法の公布（1967）

※1970 年代、学生や知識人を中心に、民主化運動が展開される

→1972 年タイ全国学生センター（National Student Center for Thailand: NSCT）の設立

→1976 年 10 月革命

【現状】・2006 年現在、国立大学 64 校。私立大学 56 校がある[Ministry of Education 2006]

・進学率は、2002 年現在、18～24 歳の総人口の 26.04%[Sinlarat 2004:(2006)216]

・独立法人化が進み、大学数は年々増加中

⇒官僚育成機関から、国民教育の機関へと変化

4. 留学中タイの大学内で出くわしたカルチャーショック

●学生街の形成と学生の生活

●学生の意識

●学生と教員の関係

●年中行事の多さ　　etc…

⇒中でも学内行事の儀礼性に関心

⇒入学時に行われる儀礼である「ラップ・ノーン」に注目

※ラップ・ノーン（*rap noong*）…

ノーン（*noong*:「後輩」、「弟」「妹」）を、ラップ（*rap*:「受け取る」、「受け入れる」）するという意味の言葉。タイ全土の大学において、新学期に見られる活動のことを指す。その内容は、上級生が新入生に試練を課し、それを乗り越えることで、新入生が学科の成員として認められるというものであり、大学、学部、学科によってその形態は様々。活動の行われる単位は様々であるが、学科単位で行われるものが重視されている。

5. 伝統的成人儀礼と大学生

出家…20 才以上の男子に許される比丘としての一時出家は在家仏教徒にとって、タンブンであると同時に成人式の役割を持つ行為としても認識される。

→学生には、一般に奨励されている雨期の 3 か月間の出家より短縮し、数日間の出家をするか、「卒業後、結婚するまでに」「親が生きている間に」出家をしようと考えていると話す者もおり、在学期間中の出家はそう一般的ではない

兵役…タイ人男性は 18 才になると予備兵名簿に登録され、21 才に達した時点で徴兵検査を受けることになっている

→学生は、重要な役職についている者と同様、26 才まで徴兵検査の延期が可能である

⇒大学生は、伝統的タイ社会において成人儀礼の役割を果たしていた事柄から、猶予があたえられた存在

6. ラップ・ノーンをめぐって

【起源】・戦時中の新兵訓練に起源？

・学生運動の際に発生？

・欧米諸国の大学に留学した教員たちによって持ち込まれた？

e.g Charnvit Kasetsiri の説

【事件】・近年、ある私立大学でのラップ・ノーンの様子を撮影した写真がメディアで取り沙汰されるなど、ラップ・ノーンをめぐる事件や事故の報道が目立つ。

eg.　2005 年の 19 歳の新入生の自殺、写真の流出

→保護者、教員からラップ・ノーンの禁止、制限が強化される傾向がある

【議論】「新しい環境や学友と馴染むために有効」

eg.Aathit Saothongyai 教授の見解

「自主性を欠いた、上級生からの圧制による悪習」

eg. Giles Ji Ungpakorn による批判「SOTUS = Stupid Outdated Tyranny　Uncivilized Stop it!!!」

⇒「一定の管理の元に続けられていくべき伝統」

eg. 教育省の通達によるラップ・ノーン実施上の鉄則

ラップ・ノーンの実施そのものを禁止するのではなく、管理下で続けられるべきだとする見解

7. 事例

対象：某大学　X 学部 Y 学科

在籍者数）一年生 32 人　二年生 28 人　三年生 23 人　四年生 16 人

期間：約二週間

（実活動日数　10 日間＋終了後レクリエーション 1 日）

【手順】（1）準備期間。高校を卒業したばかりの入学予定者が、新 2 年生によって呼び集められる。

（2）活動。新学期開始から約 2 週間の期間に渡り、放課後新入生は 3，4 年生に呼び出され、毎日数時間に渡ってワーク、ブーム、歌の練習などが行われる。

※ワーク…3，4 年生が新入生に言葉の暴力を浴びせ、罵倒する行為。

ブーム…学科の掛け声。体育祭のエールや飲み会のコールと呼ばれているものに近い。

（3）受け入れ。新入生たちが良く試練に耐え、Y 学科の学生たる SOTUS を示したことが認められ、3，4 年生たちは、新入生を後輩とすることを宣言する。新入生を囲み、蝋燭を灯し、歌を歌う。ひとりひとりの手首にサーイシンが結ばれる

※サーイシン…年長者から結ばれることでお守りとなる紐

（4）レクリエーション。ラップ・ノーン最終日の翌日、後輩と先輩として学科の学生全員が集まり、草すべりなどのゲームをして打ち解ける。新入生には学科の通称が与えられる。

【特徴】・学科ごとを単位として行われる

・学生たちの自治によって行われ、秘儀性を持つ

・新入生に大学生としての行動規範、SOTUS（“Seniority”、“Order”、“Tradition”、“Unity”、“Spirit”）を身につけさせることを目的にうたっている。

・手順、役割などが定められ、形式立った行為として行われる

・学科の全ての新入生が対象→非選択性

・時間的、肉体的負担が大きい

・儀礼の際中に泣き出す新入生、体調を悪くする学生もあるが、儀礼を非常に重視

・学年毎に役割分担

→来年以降、上級生の役回りを演じることに抵抗を覚える 2 年生、またそう思った経験がある 3,

4 年生の発言

・儀礼前後の変化　→演劇性

8. 考察

①学生の儀礼に対する潜在的ニーズ

・「ラップノーンがなければ困る」「ラップノーンを完了しなければ、大学生活は困難になる」

・最終日のサーイシンや蝋燭を使った儀礼

・仏教儀礼をはじめとした日常的な儀礼の実践の模倣

・比丘としての出家、兵役など、伝統的社会における成人儀礼からの猶予という背景

②実社会における序列関係の模倣

・ピーノーン（*phii noong*）関係の重視

・学年ごとの役割分担

・服装規範

・同じ「学生」であっても、「学年」という細分化が行われ、年功序列関係が強調される

・実社会へ出るための訓練、練習期間として学生期間。タイの伝統的階層社会の模倣

③タイの大学の収束性

・ほぼ全員が参加

・学生全員がラップ・ノーンを非常に重視

・新入生は全員が学内の寮で生活

・学外での活動の機会が限られている背景

④メタ・イニシエーションとしての役割

→ラップ・ノーンは学科の成員権獲得と成員性強化のための加入礼であると同時に、大学生の内面的成熟のための成人儀礼の一部であると捉えられる。

⇒明確な成人儀礼が指摘されにくいとされている現代社会においてもイニシエーション儀礼の役割を果たすものが浮かびあがる。

⇒加入礼と成人儀礼の差異と連続性の議論を深める可能性

ラップ・ノーンは、複数の要因から成る蓋然の結果、「大学」という空間が本来持つ学部、学科という構造を残したまま、それが儀礼の場へと転化した事例。

9. 地域研究と通文化研究の鍵としての大学

●「大学」をフィールドとし、学生たちの行う儀礼的行為から、タイ社会の一側面を読み解く

●他の国家にも一定の共通性を持って存在する「大学」をフィールドとすることで、通文化研究の可能性を開く

●個から全を読み解く、特殊と普遍に注目する人類学的研究の一助となるのでは

●公共人類学への可能性

「大学」をフィールドワークすることのすゝめ

参考文献

（和書）

綾部真雄　2006　「イニシエーションの今日的可能性」『イニシエーション』ラ・フォンテイン（著）弘文堂

アリエス,フィリップ　1998（1980）『＜子供＞の誕生』杉山光信、杉山恵美子（訳）　みすず書房（Philippe Aries 1960, 1973 "*L'enfant Et La Vie Familial Sous L'ancien Regime*" Paris :Edition du seuil,）

アレン,M.R　1978　『メラネシアの秘儀とイニシエーション』中山和芳（訳）弘文堂（Allen,Micheal R 1965 "*Male cults and Secret initiation in Melanesia*" Melbourne: Melbourne University Press）

エリアーデ,M　1998（1971）　『生と再生――イニシエーションの宗教的意義――』堀一郎（訳）　東京大学出版（Eliade, Mirca 1958 *"Birth and Rebirth*" New York: Harper and Brothers Publishers）

エレンベルガー,アンリ　1980　『無意識の発見』上・下　木村敏、中井久夫（監訳）　弘文堂（Ellenberger, Henri F. 1970 *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry* New York: Basic Book）

岡部 恒治、西村 和雄、戸瀬 信之（編） 1999 『分数ができない大学生』東洋経済新報社

――― 2000　『少数ができない大学生』東洋経済新報社

小此木 啓吾　1981　『モラトリアム人間の時代』 中央公論新社

笠原嘉　1976　「スチューデント・アパシー」『精神科医のノート』笠原 嘉 (著) pp.3-15 みすず書房

勝俣暎史 1983　「大学生と適応障害」『大学生の心理』関 一、返田健（編）pp.200-219　有斐閣

加藤秀俊　1989 「大学人類学への試論」『季刊人類学第 20 巻第 3 号』京都大学人類学研究会（編）講談社

金子元久　2007 『大学の教育力』筑摩書房

河合隼雄　1996　『大人になることのむずかしさ』岩波書店

――― 2000　「イニシエーションと現代」『心理学療法とイニシエーション』河合隼雄（編）　pp.1-19 岩波書店

栗原彬 1981 『やさしさのゆくえ現代青年論』筑摩書房

古市裕一 1983「モラトリアムの現在化」『大学生の心理』関 一、返田健（編）p.136　有斐閣

白石義郎　2003　「新入生の大学への適応」『キャンパスライフの今』武内清（編）pp.106-117 玉川大学出版部

シンララート,パイトゥン　2006　「タイの大学――過去、現在、未来」馬越徹（訳）『アジアの高等教育改革』　P.G アルドバック、馬越徹（編）pp.216-237　玉川大学編集部（Sinlarat, P. 2004 'Thai Universities: Past, Present and Future', in P.G. Altbach and T. Umakoshi (eds.) *Asian Universities: Historical Perspectives and Contemporary Challenges* pp. 201-219 Baltimore: John Hopkins University Press）

土川隆史　1981　「スチューデント・アパシー」『キャンパスの症候群―現代学生の不安と葛藤』笠原嘉、山田和夫（編）pp.143-166 弘文堂

トロウ,マーチン　2000 年　『高度情報化社会の大学』喜多村和之（訳）玉川大学出版部。（Trow, Martin　2000 *From mass to universal higher education* Berkeley :　University of California）

中山和芳　2002（1990）「イニシエーション」『文化人類学事典』pp.59-60

西島建男　1978　『大学再考』新泉社

西平直喜　1990　『成人(おとな)になること―生育史心理学から』東京大学出版会。

西村良二・塚田淳也　2002　「思春期・青年期の発達儀礼」『教育と医学　50 巻 2 号』pp.42-48 慶応義塾大学出版会。

ニューマン,J.H　1949 『大學の理念』増野正衛譯（訳）弘文堂（Newman, John Henry, 1931 *Select discourses from the idea of a university*　Cambridge: Cambridge University Press）

新堀通也　1985 年　「今日の学校は青春にとって何か」『教育と医学　33 巻 4 号』pp.24-30　慶応義塾大学出版会

ハギンス,C.H　1977 『大学の起源』青木靖三、三浦常司（訳）社会思想社（Haskins, Charles Homer 1957 *Rise of Universities* NewYork: Cornell University Press）

橋本伸也　2001　『エリート教育』ミネルヴァ書房。

ファン・ヘネップ　1995 『通過儀礼』綾部恒雄、綾部裕子（訳）弘文堂。（Gennep, Arnold Van　1909 *Les Rites de*

Passage　Paris: Librairie Critique）

船曳建男　2005　『大学のエスノグラフィティ』有斐閣

フレックスナー,エイブラハム　2005　『大学論』坂本辰朗、羽田積男、渡辺かよ子、犬塚典子（訳）玉川出版社（Abraham Flexner 1969　*Universities : American, English, German*　Oxford : Oxford University Press）

ペリカン,ヤーロスラフ 1996　『大学とは何か』田口孝夫（訳）法政大学出版局（Perikan, Jarsolav 1992 *The Idea of the University* New Haven: Yale University Press）

ラ・フォンテイン,J.S　2006　『イニシエーション――儀礼的“越境”をめぐる通文化的研究』綾部真雄（訳）弘文堂。（La Fontain, J.S 1985 *Initiation Ritual*）

ユタン, セルジュ 1972 『秘密結社』　小関藤一郎（訳）　白水社。（Hutin, Serge 1956 *Les Societés Secrètes* Paris:Press University de France）

ワトソン,キース　1993　「タイの大学の発展　――西洋モデルと伝統モデルの融合」大塚豊（訳）『アジアの大学　――従属から自立へ』pp.91-377 玉川大学出版（Watoson.K, 1989 "Looking West and East: Thailand's Academic Development" *From Dependence to Autonomy. The Development of Asian Universities*　Philip,A.G., Viswanathan ,S eds. Massachusetts: Kluwer Academic Publishers.）

（洋書）

Bowie, Katherine A.　1997 *Rituals of National Loyalty: An Anthropology of the State and the Village Scout Movement in Thailand.* New York: Columbia University Press

Blythe, Wilfred 1969 *The Impact of Chinese Secret Societies in Malaya, a Historical Study.* Oxford: Oxford University Press

Coalition to Stop the Use of Child Soldiers　2008 “THAILAND”　*Child Soldiers Global Report 2008*　London: Coalition to Stop the Use of Child Soldiers

Embree,　John.F. 1950　"Thailand—A LooselyStructured Social System," *American Anthropologist*, Vol. 52 pp. 181-193

Gary A. Olson, Sidney I. Dobrin eds,　1994　*Composition Theory for the Postmodern Classroom*　Albany: State University of New York Press

Gottesman, Greg and Baer, Daniel 2004 *College Survival.* New Jersey: Peterson's.

Sacks,Peter　1996　*Generation X goes to college*　Chicago: Open Court Publish Company

Ungpakorn, Ji Giles 2003 “From the city, via the Jungle, to defeat: the 6th Oct 1976 bloodbath and the C.P.T” *Radicalising Thailand: New Political Perspectives* Ungpakorn ed. Bangkok: Asian Studies, Chulalongkorn University

Watoson J.K.P., 1981 “The Impact of the Karachi Plan on Educational Development in Asia”, *International Journal of Education Development*, 1, pp.32-49

Walters, P.A. 1961 “Student Apathy”. *Emotional Problem of the student*　Blaine G.B and McArthur,C.C (ed.) New York: Appleton Century-Crofts

Por 2004 “The time for a bright future without SOTUS” *The Side UP! – The official Student Magazin of the Computer Enginnering Department,KMUTT* vol.2, Summer Edition March-June 2006 p.3 CyberAnt Magazine ed. Thonburi: King Mongkut's University of Technology

Khana luuksua prachaaat thai 1971 *prawat khana luuksua 60pii*　Bangkok: roongphim khurmsaphaalaatphraao

Ministry of University Affairs 1992 *Song thosawat thahoung mahavithyalai*　Bangkok :Chulalongkorn University Printing House.